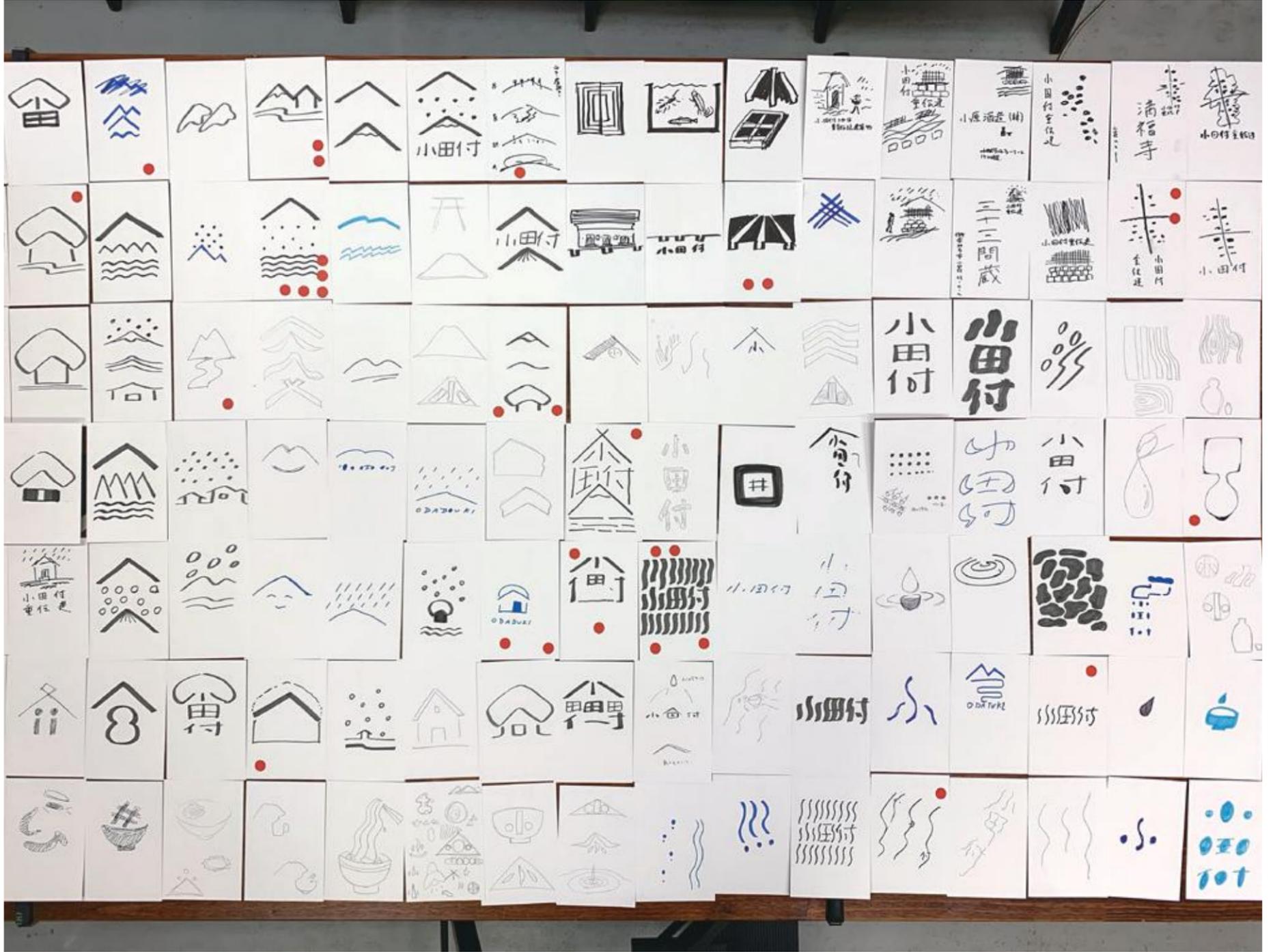


おたづき探検

発行 キタ美実行委員会
 監修 喜多方市都市整備課, 文化課
 デザイン 筑波大学芸術系 PLAY RESILIENCE Lab.
 発行日 2021年6月15日



15分でできるだけたくさんアイデアを出す視覚的なブレインストーミング、スプリント法を活用して小田付重伝建を象徴するモチーフのアイデアを探った。2021年2月12日, 筑波大学芸術系原研究室 PLAY RESILIENCE Lab.にて。



町並み・建築・水路。 重伝建に住むということ

重伝建に住むということはどういうことなのでしょう。テクノアカデミー会津観光プロデュース学科の学生たちが、現在重伝建にお住まいのお三方に建築, 水路, 小田付の思い出についてお話を伺いました。 **P2-3**



標識デザインプロジェクト デザイン案を公開します

昨年度からのリサーチで得られた知見を元に、標識デザインを進めていた筑波大学芸術系原研究室 PLAY RESILIENCE Lab.。標識デザイン案を初公開。 **P4-5**



小田付重伝建の映像 「水流の小田付」

表堀, 中堀, 裏堀。重伝建選定の決め手のひとつになった水路のある小田付。表層の水, 深層の水。自然の水, 生活の水。映像作家飯田将茂さんが水にフォーカスして小田付重伝建の姿を捉えました。 **P6**



座談会: 小田付重伝建の担い手たち

重伝建に関わる方々が集まり、座談会を開きました。長年の活動の結果として重伝建に誇りを持つ市民が増えていきます。中堀が寸断されていることや、町なかに子供が少ないことなどの課題も共有されました。 **P7**

みんなでつろう 小田付 重伝建 標識プロジェクトとは? 喜多方市小田付地区は江戸から昭和にかけてきた古いまちなみが印象的な通りで平成30年に文化庁より「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。小田付地区の伝統的建造物(特定物件)であることを示す標識がつけられるにあたり、どんな標識にすると小田付, 喜多方の人々が誇りを持ち、見る人が楽しめるかをみんなで考えていくプロジェクトです。喜多方を学び場として長きに渡り訪れている筑波大学原研究室やテクノアカデミー会津と連携をはかりながら、活動を進めてきました。その内容をみなさんにお伝えします。これからの活動にもぜひご協力ください。

2020年度活動の流れ

みんなでつくろう

小田付重伝建標識PJ クロニクル2020.06-2021.05



2020.06.02
報告書「おたづき探検」VOL.1配付@小田付
 タブロイド判の報告書を小田付地区に全戸配付しました。



2020.11.21
映像制作 ロケハン@小田付
 映像作家の飯田さん(P6)が小田付を散策して、映像のイメージをふくらませました。



2020.11.22
取材編集ワークショップ@小田付南町2850
 編集者高山裕美子氏によるレクチャーの後、ペアになって特ダネを探る取材ワークショップを実施しました。取材って楽しい!



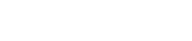
2021.02.08
重伝建在住者へのインタビュー@小田付⇄テクノアカデミー会津
 小田付「会陽館」とテクノアカデミー会津をZoomで結び、重伝建にお住まいの方にインタビューしました。(P2-3参照)



2021.01.10-11
映像制作 ロケハン&撮影@小田付
 かじかんだ手を温めながらの撮影は、冬の喜多方らしい体験でした。(撮影後のラーメンが沁みた..)



2021.02.12
標識デザイン プレインストーミング@筑波大学原研究室
 15分でできるだけたくさんアイデアを視覚化するスプリント法を活用して、小田付重伝建のマークを考えました。



2021.02.20
中間プレゼン & 「喜多方 NOW & THEN」@Zoom
 映像制作の飯田さん、テクノアカデミー会津インタビュー担当学生、標識デザイン担当の筑波大生、学生の頃喜多方でお世話になったOBOGによるプレゼンテーションが行われました。



2021.04.05-06
撮影@田付川源流、小田付
 桜の町並みと残雪の飯豊山が撮れる絶好のタイミングで小田付ロケを敢行。田付川の源流を探る旅も◎。



2021.05.08-09
デザインリサーチ、現地調査@小田付
 喜多方を訪れたことがないデザイン担当者がいたため、現地視察を行いました。水路や蔵のディテールを観察したり、標識が付けられる建築の素材を確認して、理解を深めました。



2021.05.10
デザインプレゼンテーション@NEXTDOOR
 P4-5掲載のデザイン案についてプレゼンテーションし、その後標識の素材や今後の進め方について意見交換しました。



2021.05.26
小田付重伝建座談会@小田付会陽館
 P7掲載の座談会を行いました。小田付在住者・本プロジェクトの関係者がざっくばらんに語り合い、プロジェクトの方向性や重伝建の課題について共有しました。



塚原啓市(つかはら けいいち)さん
 昭和23年生。早稲田大学サッカー部OB。鮮魚店の喜多方水産を営む傍ら、喜多方のサッカーチームを全国に押し上げる名コーチの異名を持ち、九星気学の鑑定士でもある小田付の名物おじさん!は輪ゴム鉄砲の名人。

塚原さんが使っていたスケート。60年ほど前のもの。

水がおいしいからこそお酒とかラーメンがおいしい。喜多方に来てくれた人ががっかりするような水路にはしたくない。

佐藤謙介・長澤七海と申します。今日は世間話のような感じで小田付について聞いてほしいなと思います。よろしくお願いします。塚原さんは小田付に住んでどれくらいですか？

塚原　ずっと住んでます。生まれてからずっと。(現在72歳)東京に5年、北海道に2年いたから、その7年以外の65年は喜多方に住んでる。

古い建物を残したい1番の理由はなんでしょうか？

塚原　土蔵に使用されている材木が素晴らしいからね。専門家に鑑定してもらわないとわからないけど多分ね、くりなんじゃないかなと思う。まっすぐじゃないんでね。あとはケヤキも使っているんじゃないかな、重厚な感じ。今ではできないんです。そのほかには、中堀には生活雑排水を流し、裏の堀では野菜を洗っていましたよ。

建物にまつわる思い出はありますか？

塚原　子供時代は悪さをしたら土蔵に閉じ込められたね。土蔵の中は真っ暗だからチビの頃は何となく怖かった記憶があるね。蔵の中は結構環境は良いからね。夏は涼しいし。外気温は5～6度違いますね。子供時代どんな悪さをしたかは記憶にございません。

小田付での思い出をおしえてください。

塚原　1月くらいにね、雪玉割りしてた。若い人に教えてやりてえな。朝雪が降るとね、その雪をかたーく固めていくの。小さい雪玉を作って、それを少しずつ足で圧縮していくのね、最終的には直径10cmくらいにしてたかな。冬は気温がマイナスになるからカチカチになる。それをね、近所の友達とぶつけて遊んでた。先に雪玉が割れたら負けの。勝つコツは、まあ、練習だなあ。最初に強く踏み込むと壊れちゃうからゆっくりゆっくり踏む。カチカチだからそれは結構面白いと思うよ、今度教えてあげっから。

あとね、冬になるとスケートして遊んでたね。それで初市の店まわりもしたね。長靴にバンド止めて、遊んでた。今と違って融雪が無いから、路面が凍るし、車もそんな通っていなかったから。なんでも昔は自分でつくってたんだよ。例えば、アイ

インタビュー：重伝建地区にお住まいの方に伺う小田付のストーリー

町並み・建築・水路。小田付重伝建に住むということ

重伝建に住むということはどうことなのでしょう。テクノアカデミー会津観光プロデュース学科の学生たちが重伝建にお住まいのお三方に、建築、水路、小田付での思い出について伺いました。



樟山尚美(くぬぎやま なおみ)さん
 福島県一の大米穀商と言われた蔵屋敷を、食事処としてもなすあづまさの若女将。あづまさを継いで17年。子育てに奮闘しながら、素敵な笑顔と独自のおもてなしスタイルであづまさのみならず、喜多方のファンを増やしている。

「喜多方よかった」と言って帰ってもらえるようにしたい。

はじめまして、テクノアカデミー会津の諏佐由佳と長澤七海です。本日はどうぞよろしく願います。はじめに、ご自分の古い建物を残したい理由をおしえてください。

樟山　父は喜多方、母は若松で。母が嫁に来るときに真っ暗な町(喜多方)に嫁にやるのは嫌だと言って、母のお父さんがまちづくりを始めました。その影響もあり両親が観光のことを昔から取り組んでいました。幼いころはビニールを張った小さい馬車が走っていて、テレビで放映されると馬車に乗りたいお客さんが増えました。けれど、お客さんを受け入れるような泊る所や食事をとるところ、お手洗いやが整備されていませんでした。だから、両親や両親と同じ世代の街を盛り上げたかと思ってる方々が集まって、自分たちで財源を出して徐々に観光をやっていくこうしている話を聞いて育ってきました。休日に両親は働いていて、どこにも連れて行ってもらえませんでした。休みが無い仕事は絶対に嫌だと思っていたので、観光の仕事には携わりたくはないと思っていました。けれど、父や母、まちづくりに関わってきたいろんな人たちの思いを大事にしたいし、仕事をする中で、町を知ってもらって「喜多方よかった」と言って帰ってもらえるようにしたいと思うようになりました。そのような思いで、この建物を残していきたいと思っています。

重伝建に住む中で、建物にまつわる思い出はありますか？

樟山　小さいころから住んでいたわけではないから詳しくはないんですが、あづまさに以前住んでいたのお孫さんがお客さんとして来てくれたことがあります。その方が「ここで遊んだ」「ここ覚えてる」「残っていてよかった」と言ってくれたんです。パチンコ屋さんになる予定だったけど、残ってくれてよかったと言われて嬉しかったです。

インタビュー：重伝建地区にお住まいの方に伺う小田付のストーリー

町並み・建築・水路。小田付重伝建に住むということ

重伝建に住むということはどうことなのでしょう。テクノアカデミー会津観光プロデュース学科の学生たちが重伝建にお住まいのお三方に、建築、水路、小田付での思い出について伺いました。

小田付での思い出をおしえてください

樟山　住んでいた町が小田付ではなく菅原町でした。お祭りと商店街が賑わっていました。ふれあい通りの小荒井のおもちゃ屋さんがあってそこに連れて行ってもらっていました。クリスマスなど特別な日はプレゼントをそのおもちゃ屋で好きなものを買ってもらいました。祭り女だったから、お祭りでは笛をふいていました。祭りはみんなやらないといけない。祭りはみんなやらないといけない。だいたい男子はソフトボール、女子はバスケに参加するのが当たり前のようになっていました。けど、できない子でもできるようになったので、良い経験となったと思います。

水路が重伝建に選定される決め手の1つだったと伺っています。水にまつわるお話はなにかはありますか？

樟山　お父さんたち世代に話を聞くと水がきれい泳いでいたという話はよく聞かけれど、自分は川で泳いだことはないな。子供のころではないけど、岩月のずっと上のほうでイwanaを見つけて、網と魚を突く道具を持って捕まえたことがありました。そのあと、食べるために水槽に入れて育てていました。子供たちに、もし住む家がなくなった時でも生きていけるようにと教えていました。三津谷の隣に川があるから、今度そこに入って遊びましょう!

今後小田付はどのようになってほしいと思いますか？ また、若い世代に向けて何かメッセージはありますか？

樟山　周りが一体となって活動していたから、守られて育ったんだなってるんです。今は、守られた立場から守る立場になりたいと思っています。そのように地域の子供たちを守ってきたいという気持ちはいつも心の中にあります。今は情報がたくさんあるから、いろいろすることがわかりすぎてしま、そこで終わってしまう。あと、今は許可とか罰則がたくさんあって何にもできなくなっているのがかわいそう。できないまより、何事にもチャレンジしていきましょう!若い人たちにお祭りとか協力してもらいたいですね。喜多方全体として、チャレンジしている人、協力していく人の想いが強いと思います。そのように若い人たちを支えたり、若い人たちのために何かできないかと考えている大人の人は多いです。高校を卒業してから学ぶために外に出る人が多いけど、それは悪いことではないと思う。ずっと地元に残っていたらそこしか見えない。外に行くことで広い視野を持って、いろんな学びを得ることができる。学んできた人たちが喜多方に意見を出してくれば町は良くなる。喜多方は学校が少ないので、出て行かないといけないから学ぶ場所をもっと増やしてほしい。自分もそういう場所を作れないか模索している。

インタビュー：重伝建地区にお住まいの方に伺う小田付のストーリー

町並み・建築・水路。小田付重伝建に住むということ

重伝建に住むということはどうことなのでしょう。テクノアカデミー会津観光プロデュース学科の学生たちが重伝建にお住まいのお三方に、建築、水路、小田付での思い出について伺いました。

小田付での思い出をおしえてください。

東海林　満福寺の前にある守商店によく行っていました。守商店は地元の駄菓子屋さんで、駄菓子やおでんが置いてありました。そのほかにはドンキーコングやパックマンなどのゲームが置いてありましたね。小学生から高校生までみんな集まっていましたよ。要はたまり場で(笑)私はよくスモモや酢いかを買っていました。スモモなんか当時10円で、おばちゃんに10円払って、瓶に入っていたのを自分で1つとって食べていました。まもるみせ(守商店の呼び名)のおでんは、煮卵は30円でさつまあげなんかは20円だったと思います。ペビースターをおでんの出汁に入れて食べるのがステータスでした!(笑)味はちょっと濃くなってしまったんですけどね。だから、100円あれば満足できました。そして、買ったものを満福寺の境内でみんな食べていましたよ。

暖かくなったら川に遊びに行きたいです。本日はどうもありがとうございました。

Interviewed on February, 13 2021



Interviewed on February 8, 2021

東海林和宏(しょうじ かずひろ)さん
 造り酒屋の夢心から分家し、三代続いた麴屋の四代目だが、家業は継がず市役所勤務の向夢飲(こうむいん)。喜多方の四季と風土とフードとお酒と祭りとバスケット好きな、皆仲良く笑顔いっぱい愛と夢いっぱい生きてい52歳。

中堀のせせらぎを聞きながら寝ています。

大塚おもて・清水田京禪と申します。小田付通りについて聞いてほしいなと思います。どうぞよろしく願います。まず、お住いの古い建物を残したい理由を教えてくださいませんか？

東海林　1968年に生まれてから高校卒業まで今の家で育って、仙台に出て大学卒業後、仙台で就職してたんですが、長男坊だから戻ってきました。家業は麴づくりと味噌づくりでした。醤油や酒造りに麴は使うから昔は麴を作ってるところが小田付には多かった。このご時代だからそれだけでは食っていけないと思い、市役所に勤めました。長年自分を育ててくれた家に愛着が出てきて残したいと思うようになりました。

建物やご家族にまつわる思い出はありますか？

東海林　昔は8月の夏祭りや初市になると叔父や叔母など親戚が大勢集まって、居間の襖を取っ払って宴会などをやりました。今はコロナ禍で親戚がみんな遠くにいってしまってなかなか集まる機会が減ってたけれども、それでも塩川や若松など近隣にいる自分のおじ、おば(親の兄弟)が集まって宴会をしています。

Interviewed on February 8, 2021

小田付での思い出をおしえてください。

東海林　満福寺の前にある守商店によく行っていました。守商店は地元の駄菓子屋さんで、駄菓子やおでんが置いてありました。そのほかにはドンキーコングやパックマンなどのゲームが置いてありましたね。小学生から高校生までみんな集まっていましたよ。要はたまり場で(笑)私はよくスモモや酢いかを買っていました。スモモなんか当時10円で、おばちゃんに10円払って、瓶に入っていたのを自分で1つとって食べていました。まもるみせ(守商店の呼び名)のおでんは、煮卵は30円でさつまあげなんかは20円だったと思います。ペビースターをおでんの出汁に入れて食べるのがステータスでした!(笑)味はちょっと濃くなってしまったんですけどね。だから、100円あれば満足できました。そして、買ったものを満福寺の境内でみんな食べていましたよ。

水路があることで有名な小田付ですが、水にまつわるエピソードはありますか？

東海林　今でも地下水を使っています。中堀のせせらぎを聞きながら寝ています。この中堀は区長さんが水の流れを調節して管理しているから、雪が降った時や大雨の時は流れを少なくしたり、流れを止めたりしています。あとは、堀が表・中・裏の3本あって、表裏の堀には魚や小さいエビがいて、今は子供たちが道路に寝っ転がってぼよとかはやを釣って遊んでいます。そのほかには、中堀には生活雑排水を流し、裏の堀では野菜を洗っていましたよ。

建物にまつわる思い出はありますか？

塚原　子供時代は悪さをしたら土蔵に閉じ込められたね。土蔵の中は真っ暗だからチビの頃は何となく怖かった記憶があるね。蔵の中は結構環境は良いからね。夏は涼しいし。外気温は5～6度違いますね。子供時代どんな悪さをしたかは記憶にございません。

今後、特に若い世代に引き継いでほしいことはありますか？

東海林　正直に言うと、若い世代が全然小田付にいないんですよ。自分の子供も含めて地元に戻ってくることも少ないです。自分が若い世代に入るんじゃないかなと思います。夏の祭りも体力勝負なところがあるから、祭りとかのイベントの時に帰ってきて参加してほしいし、伝統を受け継いでいてほしいなと思います。あと、1番大切なと思うのはやっぱり喜多方のことをもっと好きになって長く住んでほしいなと思います。喜多方の魅力をもっと知ってもらう中で、例えば、喜多方には季節によっておいしい食材がたくさんあるよね!春は山菜食べて、秋はキノコ汁作って食べて…食べることばかりだけど、喜多方の良さを知ってほしいし好きになってほしいかなと思っています。最後に、自分はデジタルは苦手だから、若い世代のみんなにデジタルでもっと喜多方の情報を発信してほしいなと思います!

素敵なお話を聞くことができてよかったです。どうもありがとうございました。

Interviewed on February 8, 2021

デザイン提案のまとめ

標識プロジェクト デザイン案を公開します

昨年度からのリサーチで得られた知見を元に、標識デザインを進めていた筑波大学芸術系原研究室 PLAY RESILIENCE Lab.。標識デザイン案を初公開。



王 旭驊 *Xuhua Wang*

小田付で見つけたグラフィックエレメントをマークにする

2つのマークの要素は小田付の水文化に基づいています。1つ目のデザインは散歩していた時に偶然目に留まった壁に貼ってある「水神のお守り」からヒントを得たものです。ここの水がとても魅力的なのは、きっと水神の保護を受けているからに違いない、という考えに基づいて、「水神守護」という四つの漢字の形を通じて、解体した字体を再構築し、組み合わせることで「小田付」の新しい字体を作りました。図形の水紋はやはり水神守護符の伝統的な紋様を用いており、長い歴史を連想させます。2つ目のロゴのデザインは印鑑をモチーフにしています。喜多方は漢字のままと聞き、漢字の「小田付」を使った図形の作成を試みました。新しい図形は、シンメトリーな感じを持つだけでなく、可読性を保ったうえで「小田付」の「小」の字に「水」の字の印象を与えられるようにすることで、小田付の水の魅力を強調しました。



石井 野絵 *Noe Ishii*

親しみと歴史の堆積を記録する手に取れるサイン

小田付に暮らす人たちの間で親しまれ、小田付に訪れる人にもわかりやすく親しみやすさを感じさせるものでありながら、その歴史やまちの暮らしを話すコミュニケーションを生むきっかけとなる標識を目指してデザインしました。シンボルマークは、小田付を象徴する「蔵」と「水」と「水路」をシンプルで伝統を感じられる形で表現し、子供も大人も誰もが描けるわかりやすい形にすることで、地元を愛され語り継がれるものになるよう工夫しました。形に関しては、銭湯の松竹錠のように各家の受け皿にそれぞれの木札をはめる形にすることで、その建築にはまる唯一の鍵のような存在、アイデンティティとして標識を位置付けました。受け皿の部分にステンシルでナンバーを入れることで、時が経つにつれて、木札がその部分だけ日焼けし色が濃くなっていき、歴史とともに標識も重厚感が増していきます。また、木札の形は上部を自由な形にカットすることで、蔵をイメージしたシンボルマークの上の部分に、雪が積もっている様子や遠く山並みのイメージなどを表現できるようになっています。手にとるという体験から親しみやすさと様々なコミュニケーションが生まれ、小田付の歴史や暮らしが小田付内外の人々の間で広がっていくことを願ってデザインしました。



浜野 那緒 *Nao Hamano*

金メダルのあるおうち!

地域の誇りとなる標識を目標にデザインを考えました。重伝建である、つまり価値が高いものだと思われたということです。そのことを誰にとってもわかりやすくキャッチーに伝えるために、金メダルをモチーフにしました。例えば「金メダルのあるおうち!」という地域の子どもの興味と発見から、大人たちがストーリーを語り継ぐようなコミュニケーションが生まれるきっかけになるかもしれません。マークのデザインは、小田付の「小」と小田付の豊かな資源である3つの水路を表しています。柔らかくありつつも強さのあるそんな小田付らしいシルエットを表現したいという想いで制作しました。

西城 裕太 *Yuta Saijo*

小田付のディテールに乾杯!

小田付の土地や人々と接していて、その魅力は語り尽くさないストーリー、何度きても新しい発見があることだと感じました。それをサイン制作においても活かさないだろうか考えたとき、シンプルな形や文字にできるだけ多くの小田付らしさを詰め込むデザインにしたいと思いました。蔵の形は小田付に実在する蔵の形を参考にし、小田付の人々の目に馴染みがあり、かつ外人には一目で蔵とわかるようにシンプルな形で蔵を作りました。文字では水を連想するようなたまりのある文字を選び、喜多方の水文化を連想させます。小田付の魅力を一目でわかるデザインを目指しました。



小島 愛可 *Aika Kojima* デザイン 小竹 拓真 *Takuma Kotake* 原案

会津型染の紺から着想したランドスケープの図案化

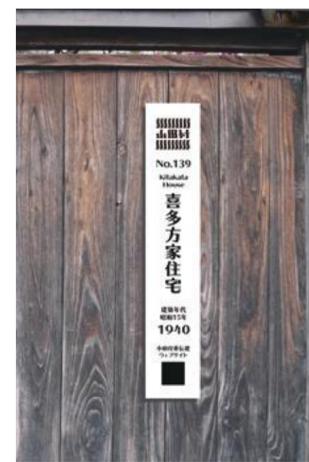
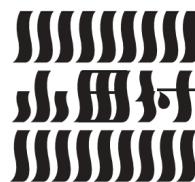
会津型は伊勢白子、京都、江戸と並ぶ染型紙の生産地です。現在では染型紙は福島県と喜多方市の「有形民俗文化財」に指定されています。江戸時代後期から作られた会津型は地域の歴史が詰まった喜多方の誇らしい文化です。また、喜多方市小田付伝統的建造物群保存地区の町並みにも着目しました。江戸時代末期までに成立した道路や水路、宅地割がよく残され、店蔵が建ち並ぶ歴史的な由緒ある町です。大きな十字路に着眼し、保存地区を上から見たマップを作成しました。会津型の紺のパターンとランドスケープを合わせることで、他にはない小田付の魅力を伝えることができるのではないかと、この二つの要素をモチーフとしたデザインにしてみました。



田中 陽 *Yo Tanaka*

歴史的町並みにそっと寄り添うサイン

美しく歴史的な町並み。その町並みを保存しつつ継承していくサインの形を探り、情報を削ぎ落とし色とサイズに落ち着きました。ロゴデザインでは、小田付の魅力の源である水を訪問した人にはっきりと伝えることを意識しました。小田付の水を知ることが自ずと小田付のよりディープな魅力にたどり着く入り口になると考えました。また、文字によって蔵の形も現れます。サインでは白・黒・茶の様々な壁がある中で、どの色でも埋もれない青みがかったグレーの鉄板を採用。水辺の濡れた丸石のような印象を持たせます。サインの下部には3つの掘り込みを入れることで、水路を表現しました。密かに小田付の魅力を伝えるツールになると嬉しく思います。



大山 未聖 *Misei Oyama* デザイン 小山 莉瑛子 *Rieko Koyama* 原案

水の音を聞きながら就寝する小田付の人々

小田付の大きな特徴のひとつである、水の豊かさのイメージを前面に押し出すサインです。小田付の文字の上下に入れたストライプは、流れる水を表しています。町中に巡らされている水路から聴こえる水の流れる音は安らぎをもたらし、わたしたちを穏やかな気持ちにさせてくれます。そこで、そんな音が連想されるようなサインであると小田付の良さが一層感じられるのではないかと思います。小田付には、一度訪れたら何度でもこの場所に帰ってきたいと思わせるような魅力があります。その魅力を伝えるため、訪れた人にとってこのサインはなんだろう?と引っかかりを持ってもらえるような印象的なストライプにしています。「付」の文字の点をしずく型にすることで、より水らしさを強く伝わるようにしました。



多辺田 風香 *Fuka Tabeta*

ガラスサインの透明感

小田付を語る上で外すことができない水という要素をサイン自体に投影するために、素材感で水表現しました。透明感の強いサインにすることで目立ちすぎずも珍しさから注目を集めるような、そんなサインにしています。ガラスは酒瓶で作れると小田付ならではのものになるのではないかと考えています。そして今回、初めて小田付で3日間過ごして、中でも印象的だったのが「流れ」です。町並みから歴史や時の流れだったり、町を囲う山の稜線の流れ、そしてどこいても聞こえてくる水の流れる音。この流れをデザインに落とし込むにはどうしたらいいか考え、1本の線で小田付重伝建をつないだタイポグラフィを作成しました。文字盤の文字もタイポグラフィとサインに合うような軽やかな文字を採用しています。



小田付重伝建の映像制作

小田付重伝建映像「水流の小田付」

表堀、中堀、裏堀。重伝建選定の決め手のひとつになった水路が残っている小田付。表層の水、深層の水。自然の水、生活の水。映像作家飯田将茂さんが水にフォーカスして小田付重伝建の姿を捉えました。



冬の小田付を歩いていると、足元をくすぐるようにして柔らかな水音が聞こえてくる。膨れた雪の隙間に水路が流れ、チリチリと雪降る静けさの中で「水がある」ことに、はっとする。「水がある」ということ。人の暮らしに水が欠かせないの言うまでもないが、その関係を、質量をもって感じることはなかなか難しいのかもしれない。機械的に水を出し、飲み、手を洗い、顔を洗い、食器を洗い、風呂に入り、トイレを流す日常の営みは、水道料金を払うことで受けられるサービスのようであり、取り立ててそれが「水」であることをいちいち意識する暇もない。もちろんその仕組みは喜多方市でも同じだ。だが、そこかしこで聞こえてくる表情豊かな水の音が、血管の見えないツルっとした都市の日常とは対照的に、ざらざらと浮き出て、血の巡りを思い出させる。街の水路から川へ、水を辿って車を走らせると、20分ほどで田付川の源流にたどり着く。その命の始まりともいえる地点に立ってカメラを構えると、扇状に広がる水と

人の暮らしに有機的な関係を想像することができる。源流の水は刺すほどに冷たく、泡は生き物のように飛び交い、春先の急流は全てを飲み込むように暴力的だ。この先に人の暮らしがある。湯を沸かし、珈琲を淹れ、麵を茹で、酒を貯蔵する。必ずしも目に見えるものばかりではなく、足元より低く、あるいは潜在的に暮らしに溶け込む。建ち並ぶ重伝建の蔵の町並みの表層に、深層に水が流れ込み、暮らしを育むのを感じる。時代の変化とともに不可逆に進行するものがあるとして、失われることなく今を生きる人たちのリアルな日常の中に「水がある」ということに改めて意識を向けようと思う。その繊細な触り心地には、水と人との関係を呼び覚ますチャンスがある。質量をもって水と対峙するという、それは人の身体性の回復でもある。小田付にはその息遣いが確かにあって、それがとても優しく感じられるのだ。この土地に潜在する水と人との原初の関係に耳を澄まして、水が水としてある姿、形を追うようにして、カメラを回した。(飯田将茂)

飯田 将茂 (いいた まさしげ)
映像作家。玉川大学芸術学部非常勤講師。主にプラネタリウムを媒体としたドーム映像作品の制作と発表を続ける。舞踏を中心とした踊りの撮影や、舞台の映像演出等も手掛ける。長野県塩尻市で木曾の街や職人を追った《木曾塗器》の撮影をきっかけに、本プロジェクトの映像制作に参加。



水流の小田付(冬～春編)
こちらからご覧いただけます

座談会: 関係者が語る小田付重伝建

座談会 重伝建の担い手たち

重伝建に関わる方が集まり、座談会を開きました。長年の活動の結果として重伝建に誇りを持つ市民が増えています。町なかに子供が少ないことや、中堀が寸断されていることなどの課題も共有されました。

地元の人が誇りを持つ重伝建

重伝建に選定されたことについて、実際地域の方はどう思っているのでしょうか？

樟山 私は、お店に来てくれた方に、「すごいんですよ、重伝建になりました！」と紹介しています。それで実際に町歩きをしてくれるお客さんもいるんですよ。

五十嵐 重伝建というのが一般的に知られていないので、地元の人でもピンとこないことがあります。樟山さんのように、小田付の人が誇りに思って訪れた人に話しかけると説得力がありますよね。地元の人が重伝建のことを知るきっかけにすることは、このプロジェクトの狙いの1つでもあります。

星 小田付で行われてきた事業を振り返って見ると、地元の人に「ここは良い町なんだ」と実感してもらうことを目指してきたように思います。15年くらいの長い時間をかけてきて、ようやく地元の人が誇りを持つようになってきていると私は感じています。個人の所有物、建物に公的なお金がかけられることは普通はないことで、「重要だから守りましょう」と国が認めるということはすごいことなんですよ。

建物を守っていくという命題の中で、担い手たちとのマッチングは考えられますか？

五十嵐 いったん喜多方を離れた若者が、家業を継ぐために帰ってきたケースをいくつも聞いています。そうではなくて、喜多方に縁のないような人がお店をしたいと考えるところ、場所、建物の問題にぶつかります。

星 職住分離という考えかたもあります。住み心地が決して良くない小田付の建物が最初から住む必要はない。離れたところにアパートを借りて、小田付で仕事をしながら少しずつ改善していけば住み心地を良くしていくこともできるでしょう。重伝建では建物の外側に規制がかかりますが、中は自由にできます。実際に、最近、軽井沢から越してきた大工さんが、岩月の大きな古民家を素敵で快適な空間にリフォームされました。彼のように古い建物のリフォームができる人がいれば、喜多方に帰ってきたい人や越してきた人が建物をきれいにしたいと思ったときに力強い味方になるし、彼らにとってはそれが仕事になる。そんな流れができれば地域がまわっていく。喜多方の住み心地はとても良いと思いますよ。

その最初の仕組み作りが大切ですね。

田村 私は実際に小田付に住みながら働ける場所を探しています。でも、住んでみないとわからないことが多くて、簡単には決められないんです。

江畑 喜多方ではお試し住宅が山都町にあったらしくて、以前に協力隊のメンバーが使っていたそうです。小田付にも、お試し住宅があると良いですよ。

まちの中心部ほど子供が少ない

昨年度の「小田付探検隊」は喜多方の子どもたちに小田付のことを知ってもらおうという試みでした。今、小田付に子どもはどのくらいいるのでしょうか？

小原 南町ではしばらくの間0人でした。最近、分譲地ができて、そこに越してきた人たちに子どもがいて5~6人になりました。

五十嵐 小田付に限らず、喜多方の中心部に子どもが少なくなっていますよね。私の住んでいるところでも、子ども会の存続が難しくなっています。そんな状況を見ると、子どもたちに「地域の誇り」を伝えていくことは大切なことで、その中でも「重伝建」というのはとても誇らしいことです。

星 近年、喜多方市では若い人を誘致する政策がされていて、少し離れた塩川町には若い人たちが集中しています。三世帯同居家族というのは一昔前の話で、今は基本的にほとんどが核家族。喜多方の中心部ほど年寄りだけがいて、子どもは離れて新しく家を建てたりアパートに住んだりしています。古い建物は住み心地が悪いので、若い人が住みたがらないのは仕方がない。ですが、子どもに地域を誇りに思ってもらうための試みをいろいろと積み重ねてきました。外に出た後に、育った地域のことを振り返ってもらいたい。

まつりばやしでムズムズする喜多方人

「お祭り」についてお聞きします。外から来た人から見ると、喜多方のお祭りは何ヶ月も前から集まって笛太鼓の練習をして、当日の熱も半端ない。これはここでは当たり前なのでしょうか？

樟山 小さい頃からお祭りの練習は当たり前なものでした。その思い出が強く印象に残っていて、すごく良い時間でした。大人達が想いを持って見守ってくれていました。

星 私の妻は会津若松市出身ですが、祭りの違いに驚いていました。喜多方の子どもは小さい時からしっかりと祭りの練習をして体に擦り込まれています。ねりこみのリズムを聞いてムズムズしているという喜多方出身者だとわかります。

小原 南町には子ども育成会がありますが、最近では子どもがいなかったり、時々だけでも長く続かない。近くの地域と合同にすることも考えられるけれど、色々な考えの中でうまくいっていないところがあります。お盆に太鼓台の競演をするようになって、よその地域の太鼓台も目にするようになり、人の多いところの若者の数に驚きました。ただ、人数が多いと逆に参加しない子も出てくるようですよ。

星 みんな今風の祭りの服装で来るけど、

実は太鼓台の本来の格好は浴衣なんです。南町では、そこはこだわって譲りません。

お祭りの話ははじまると止まらないですね

樟山 お祭りの難しさを考えると、服を揃えるだけでもお金がかかるし、ひとり親世帯など必要な費用を出せない家庭もあるようです。

五十嵐 これまでの仕組みそのままでは無理があるのかもしれない。新しい仕組みを考えながら継続していかないと。

星 全国的に、町並み保存をされているところはお祭りの保存地域と重なるんです。地域コミュニティがしっかりしているからお祭りができる。そうすると町並み保存にも繋がります。小田付も重伝建になったことを機会に、お祭りのあり方も改善しながら伝統を継承することを考えていかないといいね。

小原 ただ、住んでいる人がいないんです。お祭り好きな人がやった方が絶対楽しい。

星 「南町に来て、お祭りに参加しませんか」という呼びかけも考えられますね。住むところを用意して、夏休み合宿をして笛を覚える、お酒も飲める。そんな企画を考えて募集をしたら面白いかもしれません。

五十嵐 筑波大の学生も、きっと手をあげてくれますよ。

いつか中堀探検隊をやってみたい

筑波大原ゼミ生が考えてくれた標識デザイン案、いかがでしょうか？

田村 最初にデザインをみんなで見た時に出した意見では、冬だったこともあり雪の景色のイメージが強いのかなということがありましたね。

五十嵐 このプロジェクトに限らず原ゼミは長く喜多方を訪れています。その関わりの中から「小田付と言えば水だね」という印象があり、そこがデザインにも反映されています。小田付の特定物件所有者からのアンケート回答を見ても、「水」をととても大事にされてきたことが強く伝わってきました。

田村 重伝建選定の決め手の1つになったのが、中堀がきちんと残されていることだったそうですね。デザインにも3本の線が水路を表しています。

星 東側の中堀は、今は何箇所も途中で寸断されているんです。駐車場の下や私有地

の中を通るような中堀を直そうとするには、重伝建の制度を使わないと現実的に難しい。せっかくだから直していかないと。

小原 私の家も中堀が家の中を通ってましたよ。30年頃前、家屋を修理した時に寸断したんです。

星 東側の中堀は、どうなっているのか一回探索してみないと。今度、「中堀探検隊」をやってみてくださいね。

3年目に向けて最後に一言お願いします。

五十嵐 3年目はデザインを実際のプレートに落とし込むことを目指します。地域の方を交えて実験的にプレートを作るワークショップができればと考えています。標識プロジェクトのゴールはプレートの完成ですが、そこは実はスタートで、大きな視点で「小田付プロジェクト」として考えて、町歩きの仕組み作りや、お祭りの応援をすることもできるかもしれません。テクノアカデミー会津の協力を得て、建物を所有する方へのインタビューを継続していくことも計画しています。小田付の宝を蓄積して活かしていきたいらと思います

Recorded on May, 26 2021

星 宏一 (ほし こういち)さん
1958年福島県生まれ。1982年京都大学理学部卒業、NEC日本電気入社。1993年合名会社星商店入社、現在同社代表社員。2003年会津北方小田付郷町祭会創立メンバー、現在同会事務局長。2019年11月より会津喜多方商工会議所副会頭。

小原 富美子 (おはら ふみこ)さん
小原酒造専務取締役。1961年福島県喜多方市生まれ。神奈川大学短期大学部卒業。会社員を経て家業を継ぐため帰郷。「蔵の町きたかた」で観光客が増えたため、町を訪れた方に酒蔵案内と販売を始める。福島清酒アカデミーで学び酒造も始めた。

田村 幸絵 (たむら さちえ)さん
1983年生。文化服装学院卒。都会や海外への憧れから上京。バックパッカーの経験により、生まれ故郷の魅力に気づいていく。2018年に子を授かり子育ての理想郷を求めUターン。現在小田付地域おこし協力隊として活動中!

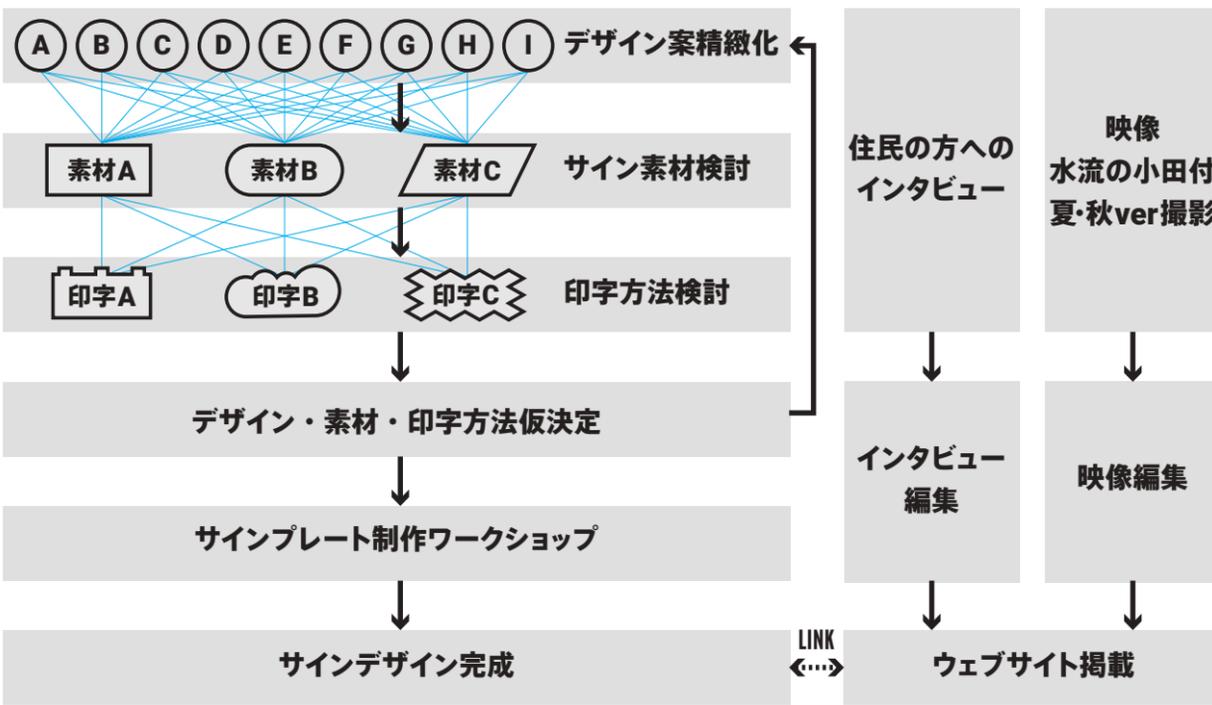
江畑 芳 (えばた かおり)さん
1984年愛知県生まれ。京都造形芸術大学大学院(現・京都芸術大学)芸術専攻修了。地域おこし協力隊として喜多方市熱塩加納町に移住。任期終了後、小田付でデザイン業として起業し、アート・プロジェクトなどにも携わる。

五十嵐 恵太 (いがらし けいた)さん
1977年、山口県生まれ。武蔵野美術大学油絵学科卒業。キタ美実行委員会事務局員。2011年に喜多方に移住し、1年かけて古民家を改装した「食堂つきとおひさま」を夫婦で営む傍ら、喜多方のアートプロジェクトをサポートしている。

※樟山尚美さんのプロフィールはP2参照



標識プロジェクト: 今後の進め方



バルセロナの旧市街に「スペリージャ」というクルマが入れない街区がある。小さな店が並び、カフェでつづく人々で賑わう通りで子どもたちが遊んでいた。そんな雰囲気には惹きつけられ観光客も集まってくる。私は、いきいきとしたまちをつくるには、脱自動車か1つの鍵を握っている。この報告書を「おたづき探検」と名付けたのは、標識を手がかりに人々が小田付を歩いて欲しいという思いからだ。人間は便利なものを求める。クルマもその1つだ。ただし、便利さと引き換えに失ったものもある。泳げるほど美しかった水路は車道になり、かつて葦が建っていた場所は駐車場になった。新しいものはつくることができるが、古いものは一度失われればもとに戻すことはできない。サンフランシスコでは古い建物ほど不動産価値が高い。町なかのビクトリア建築が若者に人気だからだ。法律などの仕組みを変えることは難しいが、私たちの意識や価値観は変えられるかもしれない。小田付が歩ける町になり、子育て世代にとって住みよい町となれば、街路で遊ぶ子どもたちの姿もみられるようになるだろうか。そんな小田付の風景を想像しながら標識のデザインを考えている。(原 忠信)

インタビュー (P2~3)を終えて テクノアカデミー会津 観光プロデュース学科



今回2回インタビューをし、1回目は直接訪問、2回目はオンラインでした。直接話すのとオンラインでは結構違いました。印象に残ったのは、小田付に住んでいる方で、アイスホッケーの道具を木で作っていたお話です。僕たちが子供の時や今の子どもたちは、ゲームなどで遊んだりすることが多いのですが、与えられたものだけでなく、自分たちで遊びを作っていくことは大事だと感じました。(佐藤 謙介)



今回、リモートでの取材のみだったので、オンラインなりに難しい点がありました。もっと詳しく引き出したかったです。小田付の皆さんは、水の話については共通して意識を持っていて、一人ひとり何かしらエピソードがあったので、水が小田付と深く関わっていることを感じることができました。取材をした方は子どもの頃、自分で遊びを作っていました、今の子どもにはあまり見られないと思います。特に、木などの自然素材と関わっているのが魅力的で、自分たちでもやってみようと思いました。(長澤 七海)



インタビューをしたお二方から、まもるみせ(守商店の呼び名)のことを耳にして、そういう地域に密着したお店があるんだなと感じました。昔からあったものをたくさん聞くことができ、それを若い世代に繋げていくことが大切だと思いました。直接インタビューをしたことでその思いをより強く感じました。(清水田 京輝)



2020年3月に子供たちと小田付のチャンピオンシップに参加しました。これまで、小田付という街と関わってみて感じたことは、行かないと小田付の魅力は分からないということです。実際に住んでいる人の話を聞くのは重要で、特に、昔の小田付の魅力を知ることができて良かったです。お祭りが賑やかだったことや守商店という地元のお店で遊んでいたお話が印象的でした。また、話を聞いていて昔の方が賑やかだったことを知りました。もちろん今の小田付も魅力はあるけれど、どこか閑散としています。賑わいを取り戻すために、小田付の認知を若い人に広められたら良いと思います。(諏佐 由佳)

編集後記 筑波大学芸術系原研究室 PLAY RESILIENCE Lab.



喜多方に来るのは今回で三回目でした。来るたびに違う体験があり、特にこの風景は、冬には雪に覆われて、北国の風景です。今回は緑の自然に惹かれ、新鮮な空気を吸って、とても気持ち良かったです。喜多方は風景が美しいだけでなく、一番忘れられないのはラーメンと日本酒です。この日本酒の種類はとて多く、これからここに何回ラーメンを食べに来てもお酒を飲んで、飽きないと信じています。私はこの風土や人情が好きです。将来は中国のもっと多くの人に喜多方の魅力を発信して行きたいと思っています。(王 旭驊)



「会津に来たときはその閉鎖的な人間関係に泣き、なじんでくると人情の深さに泣き、去るときは会津人の人情が忘れ難く泣く」という会津の三泣きの話を幼い頃よく聞いていました。なんとなくそのイメージが定着していて、今回の喜多方訪問では最初の「泣き」、よそ者の私たちにはあまり心を開いてもらえないのではないかと不安が少しありました。ですが今回の喜多方訪問でそんな寂しい思いをする事は全くなく、むしろ急に話しかけても気さくにお話してくれるし喜多方について嬉しそうに語ってくれる、喜多方の人達のお話好きで優しい人情に心の中で嬉し泣きでした。「馴染んでから人柄に触れて泣く」という間もないくらい到着してすぐ、喜多方の人達の飾らない素直さに助けられて、ちょっと街を歩いただけで自然と喜多方とそこに住む人の良さが伝わってきて、そのあたたかさの虜になって帰りたくないと思えるような素敵な時間を過ごすことができました。今回ここで見て、感じたまちの良さを自然な形で魅力的に表現できるデザイン、素敵なまちの人たちに親しみ愛されるようなデザインを提案したいと思いました。(石井 野絵)



道に迷うとgoogle mapで目的地を探す。そんな歩き方が当たり前になっていた私にとって、喜多方に住む人々は現地調査でつまづいた時でも、道を尋ねたら快く道案内をしてくれ、ちゃっかり世間話もする、とても優しくチャーミングな人柄であり、そのおかげで楽しい街歩きとなりました。気張らない素直さが溢れる街を知ることができ、人生初めての喜多方訪問はとても温かい気持ちになりました。(大日向 さや)



昨年行ったワークショップからしばらく経ち、久しぶりの喜多方訪問になりました。5月にくる喜多方は初めてで、雪の降る寒い喜多方とはまた違う景色を見せてくれてとても新鮮です。でも相変わらず喜多方の人たちは自分たちの住む街、喜多方について嬉しそうに語ってくれる。標識のデザインにおいても喜多方の人たちが語る喜多方と僕らの感じる喜多方のイメージが近づいてきているように感じる。最終的に喜多方の人々はストーリーを語り、僕らはその歴史を踏みしめながら街を歩く、そんなデザインを提案できたらいいと思います。喜多方に乾杯!(西城 裕太)



街歩きの中で、歴史をもつ壁の表情や看板の文字、雪が積もる冬に備えた三角の屋根と建物そのものが私にとっては新鮮でした。そうした町並みに囲まれるなかで聞こえる水の音が心地よかったです。その音の元を迎えるように、喜多方の人に道を尋ね案内していただき、田付川から小田付の水路に通じる取水口にたどり着いた時はなんだか感動しました。初めて喜多方ラーメンを食べ日本酒を飲み、喜多方の水を由来とする食の豊かさを感じました。水道水を美味しく飲めたのも喜多方が初めてです。(浜野 那緒)



私が小田付を訪れたのは11月でした。空気が澄んでいて、水が豊かで、ラーメンも日本酒も美味しくて、歴史ある町並みがあって優しい方たちに歓迎されていて、忘れられないとても素敵な時間です。小田付はまだ帰りたくない、また訪れたいと思わせる魅力に溢れています。そんなまちに寄り添えるサインの完成をお手伝いしたいです。(大山 未聖)



小田付を訪れた二日間は今でも素敵な思い出です。食、文化、自然だけでなく、暮らしている人の人柄が温かいのも特徴です。また、なんとと言っても重伝建はカメラを構えればどこでも絵になる場所ばかりで写真を見返すだけで小田付に帰ったような気分になります。そんな小田付の魅力をもっと多くの人に知ってもらえたら嬉しいです!(小島 愛可)



今回小田付を初めて訪れ、サインは必要ないのではないかなと思えるほどすでに美しく歴史が感じられる魅力ある町でした。そんな中で「このサインは必ず必要だ。」と感じさせるにはどうすれば良いのか。訪れた人が小田付を知る入り口になりつつ、小田付で暮らす人が小田付のもっとディープな魅力を語りたくなるようなサインのあり方を常に探りました。小田付の町並み、くらし、歴史に気づかぬうちに溶け込みサインがサインとしての役割を淡々と果たすことを望んでいます。(田中 陽)



私はつくばを出発したのが夜だったので、景色がよく見えないまま喜多方に到着しました。着くなり周りを散策してみると時代劇で見たことがある様な建物がオレンジ色のホワンとした明かりに照らされていて、異世界にいるような不思議な気持ちになりました。つくばに建っている建造物は量産型で似たものも多く、誰の目を引くこともなく風景に溶け込んでいます。しかし、喜多方の建物は一棟一棟私にここだ!と叫んでいる様な力強さとインパクトがあり、どこで写真を撮っても絵になる、そんな町並みでした。地域の方が大事に守り残されたこの町並みをもっと多くの方に知ってもらい、コロナが収まった頃に足を運んでもらえたら素敵だと思います。(多田 風香)

キタ美



発行 キタ実行委員会 (お問い合わせ:事務局 TEL 0241-23-5188 五十嵐) 協力 喜多方市, テクノアカデミー会津, a good day Co. (小竹拓真), 筑波大学芸術系原研究室 PLAY RESILIENCE Lab., 映像制作 飯田将茂 デザイン・編集統括 原忠信 (筑波大学芸術系) インタビュー 大塚おもて, 佐藤謙介, 清水田京輝, 諏佐由佳, 長澤七海 (テクノアカデミー会津観光プロデュース学科) デザイン・編集 王旭驊 (筑波大学大学院芸術学学位プログラム博士前期課程), 石井野絵, 大日向さや, 西城裕太, 浜野那緒, 大山未聖, 小島愛可, 田中陽, 多田風香 (筑波大学芸術専門学群) Special Thanks 榊山尚美さん, 東海林和宏さん, 塚原敬市さん, 小原富美子さん